

令和4年度長崎県埋蔵文化財センター
巡回遺跡展

島で生きる。海と暮らす。

五島列島の遺跡から見た交流と暮らしの変化



展示案内資料集

GOTO ISLANDS

島で生きる。海と暮らす。

五島列島の遺跡から見た交流と暮らしの変化

-2022.9.17(ST)—10.9(SUN)-

会場：新上五島町 鯨賓館ミュージアム

大小150あまりの島々からなる五島列島。その歴史は、どの時代においても海とともにありました。

今回の巡回遺跡展では、五島列島の遺跡やそこから出土した遺物を用いて、海に囲まれた五島列島の人々の生活と交流の歴史を時代ごとに紹介します。

縄文時代
旧石器

陸続きの時代から 「五島列島」誕生へ

石器時代は食料を求めて移動を続ける時代です。今よりも寒く、地表に氷が閉じ込められたため海面が今より100m以上低く、**五島列島は九州本土と陸続きとなっていました。**

縄文時代は一箇所に定住し、村を営む狩猟採集の時代になります。氷河が溶けて海面が上昇し、**海に囲まれた五島列島が誕生します。**人々は漁労活動を盛んに行い、沿岸部に多く遺跡が残されます。石鋸や結合式釣針などの漁労用石器や勾玉などの装飾品、韓国隆起文土器からは大海原を舞台に活動した当時の生活をうかがうことができます。

茶園遺跡 (五島市)



石槍 (センター所蔵)

茶園遺跡では1995年に発掘調査が実施され、4つの文化層が確認されました。この中で、第V層で出土した細石核は西北九州の旧石器時代終末段階の細石器石器群の在り方を示しており、「神子柴型」石槍、局部磨製石斧、石鏃、土器を伴って出土しています。そのため、この遺跡は**旧石器時代から縄文時代にかけての石器の変遷が読み取れる重要な場所と言えます。**

城ヶ岳平子遺跡 (佐世保市)

城ヶ岳平子遺跡は宇久島にある旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡です。1982年に発掘調査が行われ、隆線文土器・押引文土器などが出土しました。その中でも細石核は「宇久島型細石核」と呼ばれ、**限られた石材で細石刃を作っていることがわかりました。**



現在の城ヶ岳平子遺跡のようす

宮下貝塚 (五島市)

宮下貝塚は1965年と1995年に発掘調査が実施され、5つの層位が確認されました。遺物は後期の資料が中心で、質・量共に他の時期の資料を上回っています。

また、貝塚の中には**6体の縄文時代の人骨が発見されている**ほか、楕円形の土坑の中に**10本の打製石斧が集積された遺構も検出されています。**



北久根山式土器 (センター所蔵)

頭ヶ島白浜遺跡 (新上五島町)



頭ヶ島白浜遺跡は頭ヶ島のほぼ中心にある砂丘上に立地する遺跡です。

1995年の調査で縄文時代前期から後期にかけての土器や石器が多く出土しました。出土した石器の種類などから、この遺跡は定住するための集落ではなく、鯨やイルカなどを捕獲し解体するために利用した場所であったことが推測されています。また、縄文時代前期の土器ともに朝鮮半島の隆起文土器が見つかり、**海を越えたモノの交流をうかがうことができます。**

隆起文土器 (赤彩沈線文土器)

出土品 Pick Up

交流を示す貴重な資料



隆起文土器 (新上五島町教育委員会蔵)

頭ヶ島白浜遺跡で見つかった今から7,000年ぐらい前の土器です。**朝鮮半島南部で作られたと考えられています。** 轟B式土器(縄文時代前期初頭)に伴って1点のみ出土しています。新上五島町内ではこの1点のみであるため、朝鮮半島南部の人が直接もたらしたものなのか、それとも物々交換の中で頭ヶ島にたどり着いたものなのか、結論はまだ出ませんが、**当時の人々の海を越えた交流を表す貴重な資料です。**

白浜貝塚 (五島市)

白浜貝塚は五島灘から押し寄せられ堆積した砂丘上に形成されており、昭和初期から遺物や人骨が見つかる場所として知られていました。

1979年に発掘調査が行われ、縄文時代前期から弥生時代前期にかけての多くの土器・石器・骨角器や墓などが見つかりました。これらの遺構・遺物から、この地域の人々が縄文時代から弥生時代にかけて海を中心とした生活を続け、**黒曜石などの必要な石材を交易により入手していたことがうかがえます。**



白浜貝塚出土縄文土器 (センター蔵)

野首遺跡 (小値賀町)

野首遺跡は小値賀島に隣接する野崎島の西側に位置します。

1988年から4年間にわたり発掘調査が実施され、旧石器時代から中世にかけて35万点を超える遺物が出土しています。最も多い出土遺物が縄文時代の土器・石器であり、特に縄文時代前期から後期にかけての石製装身具が代表的で、石材から海を介した交易の姿を見ることができるとともに、**当時の精神文化を知る上で貴重な遺跡と言えます。**



野首遺跡の発掘調査風景

盛んな交易と 豊かな海にもとづく暮らし

弥
生
時
代

弥生時代は、朝鮮半島からもたらされた水稲耕作を生活の基礎とする時代です。稲作の導入によって人口と集落の増加が起こり、水田の管理等から貧富の差が生まれ始めます。そこから「王」が現われ、「国」へと発展していきます。

ところが五島列島では、**稲作をしていた痕跡はほぼ確認されていません**。また福江島では貝・魚・イノシシなどからなる貝塚が築かれることから、この時代にも海の恵みを利用して生活していたと考えられます。

墓制については朝鮮半島に起源がある支石墓や、北部九州で流行する甕棺墓の他、地下式板石積石棺墓という特徴的なお墓も見られます。こうしたお墓からは**沖縄産の貝輪が見つかる一方で、権威の象徴としての青銅器や鉄器はほぼ見つからず、集落の数が減少することも特徴です**。

浜郷遺跡（新上五島町）

浜郷遺跡は新上五島町中通島のほぼ中央部に所在する墳墓遺跡です。これまでの発掘調査で弥生時代前期から中期にかけての**60体を超える人骨や、ゴホウラ貝やイモ貝などの南島産貝輪が甕棺墓や箱式石棺墓などの墓から出土しました**。墓地は比較的狭い範囲に形成されており、遺跡全体で100体を超す人骨があると推定されています。南海産の貝の流通や墓地の形態から、**五島列島における弥生人の姿を知る上で極めて重要な遺跡です**。

調査当時の有川郷浜の風景



出土品 Pick Up



宮下貝塚出土貝輪
(センター所蔵)

貝 輪

貝輪とは、**貝から作製した装飾品**のことです。弥生時代、北部九州をはじめとした西日本各地で南島産（現在の沖縄地方）の貝輪が流行しました。九州で最も早くこの貝輪が登場するのが、**五島地域を含む西北九州の沿岸部**です。

この地域では縄文時代から二枚貝を用いて貝輪が作られていました。こうした古くからの伝統をもとに、西北九州の人々は縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけて、南海産貝輪をいち早く入手しました。その後、貝輪の主な消費地は福岡平野を中心とした北部九州地域となりますが、**西北九州沿岸部の人々は南島からの貝の運搬に大きな役割を果たしました**。

宇久松原遺跡 (佐世保市)



宇久松原遺跡は宇久島の東南部に所在する墳墓遺跡です。1962年に地元の古老から話を聞きとった考古学者が支石墓と認識して学会に発表したことにより、遺跡の存在が明らかになりました。その後、戦後から現在まで5次にわたる発掘調査が実施され、弥生時代早期から弥生時代前期を中心とした支石墓や甕棺墓からなる墓地であることが確認されました。

出土した人骨や副葬品、支石墓や甕棺の存在は北部九州において成立した弥生文化が五島列島にどのように伝わっていったのかを明らかにする研究で**大きな存在になっています**。

検出した支石墓と人骨

古墳時代

豪族の登場と 中央政権とのつながり

古墳時代の五島列島では、北にある小値賀島に遺跡が集中し、南側の島々には遺跡が少ない状況が見られます。この小値賀島では神ノ崎遺跡において、4世紀から6世紀中頃に南九州にまで広く分布する特徴的な墓が築かれます。ところが6世紀末から7世紀になると、神方古墳と水ノ下古墳の2つの古墳が築造され、ヤマト王権の支配地域がこの地域まで及んだことを示しています。

律令国家が成立した古代には、唐の律令制度、仏教、文化を取り入れるため、遣唐使船が五島列島を経由するようになります。こうした遣唐使船が停泊する港として、中通島には相子田の停（青方）が、福江島には川原の浦（川原）が整備されたと伝わります。福江島の大浜遺跡においては、遣唐使船が盛んに送られた8世紀から9世紀にかけての遺物が多く出土しており、官衙（役所）的な性格を持つ場所として、河原の浦と関係していたことが想定されています。

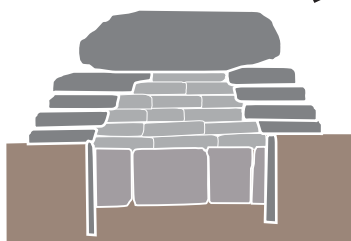
神ノ崎遺跡（小値賀町）

神ノ崎遺跡は小値賀島の南にある黒島に立地する弥生時代から古墳時代にかけての墳墓遺跡です。これまで4次の発掘調査で箱式石棺墓や甕棺墓、地下式板石積石室墓といった墓が40基近く確認されました。棺内の発掘調査では、勾玉・管玉といった多くの玉類のほか、朝鮮半島産の板状鉄斧（弥生時代中期）や陶質土器が副葬されており、弥生時代から古墳時代まで南や北の地域との交流をしていた人々の墓地在り、継続して営まれていたことが明らかとなりました。

神ノ崎遺跡のようす

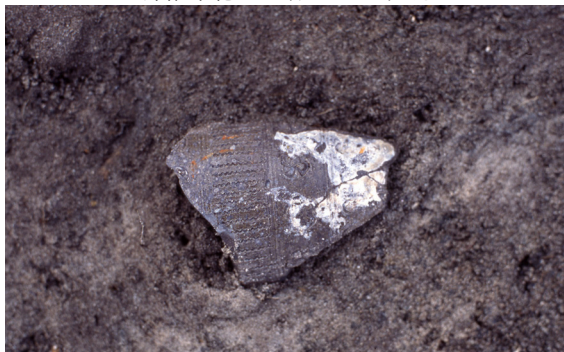


“地下式板石積石室墓”とは



地下1m程度に石棺を築造し、その縁から平らな石を数段積み上げて石室状の空間をつくり、一番上に大きめの石を1つおせて蓋をするお墓です。他地域ではあまりみられない特徴的な墓制として注目されます。古墳時代に南九州でよく似たお墓が出現することから、南九州の人々との関係も示唆されています。

新羅印花文土器の出土状況



大浜遺跡（五島市）

大浜遺跡は福江島の西側海浜部に立地する縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。

大正時代に発見され、小規模な発掘調査が何度も実施されました。その後、1962～1963年に県を中心に編成された五島遺跡総合調査会により行われた発掘調査では、弥生時代の墓坑群から牛の歯が発見され話題となりました。1997年の県の調査では古代から中世にかけての遺物が多量に出土しています。

遺跡からは墨書土器なども出土しており、古代における

官衙（役所）的な性格の遺跡と考えられています。また、8世紀頃の新羅印花文土器が出土しており、朝鮮半島との交流をうかがい知ることができます。

交易拠点としての五島列島と 豪族の繁栄

中
世

中世の五島列島は、日本と大陸とを結ぶ重要な航路に位置することから交易により富を集め、「輝く中世」と呼ばれる時期を迎えます。小値賀島の前方湾海底遺跡からは、平安時代後期から鎌倉時代にかけての中国産陶磁器類が多く発見されています。鎌倉時代から室町時代にかけては、35余りの豪族が林立し、交易や軍事的拠点としての良港や、土地や漁業権をめぐり、互いに争います。この時代、「家督の分割相続制」により、領地が細かく分割され、兄弟間・親族間の争いが頻発します。

また14世紀後半には前期倭寇の拠点として、日本海沿岸を往来し、交易や海賊行為を行う拠点であったと考えられます。

前方湾海底遺跡（佐世保市）

前方湾は、小値賀島の東部にある湾です。この前方湾は古くから漁をするアワビ漁師により「沢山の陶磁器が沈んでいる場所」として知られていました。2004年から3年間、研究機関により潜水調査と水中ロボット調査が実施されました。その結果、前方湾北部のクスクリ崎沖の海底で12～13世紀の中国陶磁器に加え、碇石が11点も発見されました。



前方湾から回収された
長胴壺と白磁皿
(小値賀町教育委員会所蔵)

日島の石塔群（曲墓地群）（新上五島町）



日島の石塔群

重要な位置を占めたことを表し、前期倭寇として交易や海賊行為により栄えた日島の輝かしい時代を彷彿とさせます。

日島の石塔群（曲墓地群）は、若松島西北の日島に所在する中世の石塔群です。五輪塔や宝篋印塔が約70基あります。このうち南北朝時代後期～室町時代前期頃（14世紀後半～15世紀前半）に作られた約45基のうち、約30基は、「中央形式塔」と呼ばれる安山岩質凝灰岩製の石塔で、遠く福井県若狭湾日引地区において採集・加工されたものです。これらは鳥取・島根の沿岸部や、壱岐・対馬・五島などの島々でも散見されますが、約30基も一箇所に集まっているのは日本最多です。このことは、日島が日本海沿岸を航行する交易ルートの



1階展示について

1階エントランスでは、新上五島町新魚目郷にある西ノ股遺跡の資料や大浜遺跡の資料を展示しています。また、センターが支援を行っている壱岐高校の東アジア・歴史コース生が研究した成果も展示しています。ぜひご覧ください。

Topic!

五輪塔と宝篋印塔について



五輪塔は、12世紀後半ごろから東日本西日本の各地に見られるお墓です。インドの古代思想における宇宙の構成要素、「地・水・火・風・空」の五大要素を表したものです。このような定形的な五輪塔が成立するのは鎌倉時代の後半で、**律宗系の僧の活躍で全国に普及しました**。五輪塔は時代が下るとともに簡略化や小型化が進み、室町時代には一つの石から五輪塔を作り出す「一石五輪塔」が出現します。

宝篋印塔は、**鎌倉時代中期（13世紀中頃）以降に石造塔となって普及します**。石造塔婆の一種で、下から方形の基礎、塔身、笠があり、その上に相隣が乗ります。鎌倉時代から南北

朝時代にかけては比較的大型ですが、室町時代になると全国の土豪階層のお墓となり、小型品が急増します。

これら中世のお墓は、ここで紹介した日島の石塔群の他にも、町の辻々にひっそりとたたずんでいるものも多々あります。ぜひ探してみてください。

黒曜石をどのように手にいれたのか

黒曜石は、**火山由来の天然のガラス**です。割れ口が鋭く、加工がしやすいため、刃を持つ石器の素材として良好です。そのため、後期旧石器時代から縄文時代、弥生時代前期まで、3万5千年近くの長い間使われ続けました。

黒曜石が生成するには一定の条件が必要で、産地はマグマの一部が急速に冷えた場所などに限られます。その産地は北部九州だと、伊万里や佐世保の周辺に多く分布しています。しかし、**五島列島では確実な黒曜石の産地は確認されていません**。

それでは五島列島で暮らした人々はどのように黒曜石を入手したのでしょうか。

今から37,000～16,000年前の後期旧石器時代は**海水面が現在より100m以上低く**なっていました。この時代、人々はナウマンゾウやオオツノジカなどの大型獣を追って、遊動生活を送っていたと考えられています。当時の五島列島は、**九州本土と陸続きであったため、黒曜石は陸路を歩いて取りに行くことが可能**でした。

ところが縄文時代になると、**温暖化により次第に海水面が上昇し**、海岸線は現在のものに近くなります。またこれと同時に、狩猟の対象もイノシシやシカなどの中型動物に加え、マグロなどの大型回遊魚や、イルカやクジラなどの海獣が加わります。このように海に囲まれた生活を始めた人々は、**舟で海を渡って、黒曜石を入手したと考えられます**。

このように五島列島に暮らした人々は、**時には野を越え山を越え、時には荒波を越えて黒曜石を入手した**、ということが推測されます。



佐賀県にある腰岳でとれた黒曜石



腰岳で黒曜石が採取できる地点

最新情報はこちら



▲ Check!

長崎県埋蔵文化財センター

〒811-5322

長崎県杵岐市芦辺町深江鶴亀触 515 番地 1

TEL: 0920-45-4080

<http://www.nagasaki-maibun.jp/index.html>

2022 年 9 月発行

Facebook でも最新情報を発信しています。